

## 医薬品インタビューフォーム

日本病院薬剤師会のIF記載要領 2013 に準拠して作成



剤形	フィルムコート錠、散剤
製剤の規制区分	処方箋医薬品 (注意-医師等の処方箋により使用すること)
規格・含量	プロピタン錠 50mg : 1錠中ピパンペロン塩酸塩 50mg 含有 プロピタン散 10% : 1g 中ピパンペロン塩酸塩 100mg 含有
一般名	和名 : ピパンペロン塩酸塩 洋名 : Pipamperone Hydrochloride
製造販売承認年月日 薬価基準収載年月日 発売年月日 ・ 発売年月日	プロピタン錠 50mg 製造販売承認年月日 : 2007年8月31日 薬価基準収載年月日 : 2007年12月21日 発売年月日 : 1965年3月1日 プロピタン散 10% 製造販売承認年月日 : 2001年7月17日 薬価基準収載年月日 : 2001年9月7日 発売年月日 : 1967年1月1日
開発・製造販売(輸入) ・提携・販売会社名	製造販売元 : サンノーバ株式会社 販売元 : エーザイ株式会社
医薬情報担当者の連絡先	
問い合わせ窓口	エーザイ株式会社 hhcホットライン フリーダイヤル 0120-419-497 FAX 03-5229-0720 <a href="http://www.eisai.co.jp">http://www.eisai.co.jp</a>

本IFは2018年3月改訂の添付文書の記載に基づき作成した。

最新の添付文書情報は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構ホームページ  
<http://www.pmda.go.jp>にてご確認ください。

## IF利用の手引きの概要—日本病院薬剤師会—

### 1. 医薬品インタビューフォーム作成の経緯

医療用医薬品の基本的な要約情報として医療用医薬品添付文書（以下、添付文書と略す）がある。医療現場で医師・薬剤師等の医療従事者が日常業務に必要な医薬品の適正使用情報を活用する際には、添付文書に記載された情報を裏付ける更に詳細な情報が必要な場合がある。

医療現場では、当該医薬品について製薬企業の医薬情報担当者等に情報の追加請求や質疑をして情報を補完して対処してきている。この際に必要な情報を網羅的に入手するための情報リストとしてインタビューフォームが誕生した。

昭和63年に日本病院薬剤師会（以下、日病薬と略す）学術第2小委員会が「医薬品インタビューフォーム」（以下、IFと略す）の位置付け並びにIF記載様式を策定した。その後、医療従事者向け並びに患者向け医薬品情報ニーズの変化を受けて、平成10年9月に日病薬学術第3小委員会においてIF記載要領の改訂が行われた。

更に10年が経過し、医薬品情報の創り手である製薬企業、使い手である医療現場の薬剤師、双方にとって薬事・医療環境は大きく変化したことを受けて、平成20年9月に日病薬医薬情報委員会においてIF記載要領2008が策定された。

IF記載要領2008では、IFを紙媒体の冊子として提供する方式から、PDF等の電磁的データとして提供すること（e-IF）が原則となった。この変更にあわせて、添付文書において「効能・効果の追加」、「警告・禁忌・重要な基本的注意の改訂」などの改訂があった場合に、改訂の根拠データを追加した最新版のe-IFが提供されることとなった。

最新版のe-IFは、（独）医薬品医療機器総合機構の医薬品情報提供ホームページ（<http://www.info.pmda.go.jp/>）から一括して入手可能となっている。日本病院薬剤師会では、e-IFを掲載する医薬品情報提供ホームページが公的サイトであることに配慮して、薬価基準収載にあわせてe-IFの情報を検討する組織を設置して、個々のIFが添付文書を補完する適正使用情報として適切か審査・検討することとした。

2008年より年4回のインタビューフォーム検討会を開催した中で指摘してきた事項を再評価し、製薬企業にとっても、医師・薬剤師等にとっても、効率の良い情報源とすることを考えた。そこで今般、IF記載要領の一部改訂を行いIF記載要領2013として公表する運びとなった。

### 2. IFとは

IFは「添付文書等の情報を補完し、薬剤師等の医療従事者にとって日常業務に必要な、医薬品の品質管理のための情報、処方設計のための情報、調剤のための情報、医薬品の適正使用のための情報、薬学的な患者ケアのための情報等が集約された総合的な個別の医薬品解説書として、日病薬が記載要領を策定し、薬剤師等のために当該医薬品の製薬企業に作成及び提供を依頼している学術資料」と位置付けられる。

ただし、薬事法・製薬企業機密等に関わるもの、製薬企業の製剤努力を無効にするもの及び薬剤師自らが評価・判断・提供すべき事項等はIFの記載事項とはならない。言い換えると、製薬企業から提供されたIFは、薬剤師自らが評価・判断・臨床適応するとともに、必要な補完をするものという認識を持つことを前提としている。

#### 〔IFの様式〕

①規格はA4版、横書きとし、原則として9ポイント以上の字体（図表は除く）で記載し、一色刷りとする。ただし、添付文書で赤枠・赤字を用いた場合には、電子媒体ではこれに従うものとする。

- ② IF記載要領に基づき作成し、各項目名はゴシック体で記載する。
- ③ 表紙の記載は統一し、表紙に続けて日病薬作成の「IF利用の手引きの概要」の全文を記載するものとし、2頁にまとめる。

#### 〔IFの作成〕

- ① IFは原則として製剤の投与経路別（内用剤、注射剤、外用剤）に作成される。
- ② IFに記載する項目及び配列は日病薬が策定したIF記載要領に準拠する。
- ③ 添付文書の内容を補完するとのIFの主旨に沿って必要な情報が記載される。
- ④ 製薬企業の機密等に関するもの、製薬企業の製剤努力を無効にするもの及び薬剤師をはじめ医療従事者自らが評価・判断・提供すべき事項については記載されない。
- ⑤ 「医薬品インタビューフォーム記載要領 2013」(以下、「IF記載要領 2013」と略す)により作成されたIFは、電子媒体での提供を基本とし、必要に応じて薬剤師が電子媒体（PDF）から印刷して使用する。企業での製本は必須ではない。

#### 〔IFの発行〕

- ① 「IF記載要領 2013」は、平成25年10月以降に承認された新医薬品から適用となる。
- ② 上記以外の医薬品については、「IF記載要領 2013」による作成・提供は強制されるものではない。
- ③ 使用上の注意の改訂、再審査結果又は再評価結果（臨床再評価）が公表された時点並びに適応症の拡大等がなされ、記載すべき内容が大きく変わった場合にはIFが改訂される。

### 3. IFの利用にあたって

「IF記載要領 2013」においては、PDFファイルによる電子媒体での提供を基本としている。情報を利用する薬剤師は、電子媒体から印刷して利用することが原則である。

電子媒体のIFについては、医薬品医療機器総合機構の医薬品医療機器情報提供ホームページに掲載場所が設定されている。

製薬企業は「医薬品インタビューフォーム作成の手引き」に従って作成・提供するが、IFの原点を踏まえ、医療現場に不足している情報やIF作成時に記載し難い情報等については製薬企業のMR等へのインタビューにより薬剤師等自らが内容を充実させ、IFの利用性を高める必要がある。また、随時改訂される使用上の注意等に関する事項に関しては、IFが改訂されるまでの間は、当該医薬品の製薬企業が提供する添付文書やお知らせ文書等、あるいは医薬品医療機器情報配信サービス等により薬剤師等自らが整備するとともに、IFの使用にあたっては、最新の添付文書を医薬品医療機器情報提供ホームページで確認する。

なお、適正使用や安全性の確保の点から記載されている「臨床成績」や「主な外国での発売状況」に関する項目等は承認事項に関わることもあり、その取扱いには十分留意すべきである。

### 4. 利用に際しての留意点

IFを薬剤師等の日常業務において欠かすことができない医薬品情報源として活用して頂きたい。しかし、薬事法や医療用医薬品プロモーションコード等による規制により、製薬企業が医薬品情報として提供できる範囲には自ずと限界がある。IFは日病薬の記載要領を受けて、当該医薬品の製薬企業が作成・提供するものであることから、記載・表現には制約を受けざるを得ないことを認識しておかなければならない。

また製薬企業は、IFがあくまでも添付文書を補完する情報資材であり、インターネットでの公開等も踏まえ、薬事法上の広告規制に抵触しないよう留意し作成されていることを理解して情報を活用する必要がある。

(2013年4月改訂)

# 目 次

## I. 概要に関する項目

1. 開発の経緯…………… 1
2. 製品の治療学的・製剤学的特性…………… 1

## II. 名称に関する項目

1. 販売名…………… 2
  - (1) 和名…………… 2
  - (2) 洋名…………… 2
  - (3) 名称の由来…………… 2
2. 一般名…………… 2
  - (1) 和名 (命名法)…………… 2
  - (2) 洋名 (命名法)…………… 2
  - (3) ステム…………… 2
3. 構造式又は示性式…………… 2
4. 分子式及び分子量…………… 2
5. 化学名 (命名法)…………… 2
6. 慣用名、別名、略号、記号番号…………… 3
7. CAS登録番号…………… 3

## III. 有効成分に関する項目

1. 物理化学的性質…………… 4
  - (1) 外観・性状…………… 4
  - (2) 溶解性…………… 4
  - (3) 吸湿性…………… 4
  - (4) 融点 (分解点)、沸点、凝固点…………… 4
  - (5) 酸塩基解離定数…………… 4
  - (6) 分配係数…………… 4
  - (7) その他の主な示性値…………… 4
2. 有効成分の各種条件下における安定性…………… 4
3. 有効成分の確認試験法…………… 4
4. 有効成分の定量法…………… 4

## IV. 製剤に関する項目

1. 剤形…………… 5
  - (1) 剤形の区別、外観及び性状…………… 5
  - (2) 製剤の物性…………… 5
  - (3) 識別コード…………… 5
  - (4) pH、浸透圧比、粘度、比重、無菌の旨及び安定な pH 域等…………… 5
2. 製剤の組成…………… 5
  - (1) 有効成分 (活性成分) の含量…………… 5
  - (2) 添加物…………… 5
  - (3) その他…………… 5
3. 懸濁剤、乳剤の分散性に対する注意…………… 5
4. 製剤の各種条件下における安定性…………… 6
5. 調製法及び溶解後の安定性…………… 6
6. 他剤との配合変化 (物理化学的变化)…………… 6

7. 溶出性…………… 7
8. 生物学的試験法…………… 7
9. 製剤中の有効成分の確認試験法…………… 7
10. 製剤中の有効成分の定量法…………… 7
11. 力価…………… 7
12. 混入する可能性のある夾雑物…………… 7
13. 注意が必要な容器・外観が特殊な容器に関する情報…………… 7
14. その他…………… 7

## V. 治療に関する項目

1. 効能又は効果…………… 8
2. 用法及び用量…………… 8
3. 臨床成績…………… 8
  - (1) 臨床データパッケージ…………… 8
  - (2) 臨床効果…………… 8
  - (3) 臨床薬理試験…………… 8
  - (4) 探索的試験…………… 8
  - (5) 検証的試験…………… 8
    - 1) 無作為化並行用量反応試験…………… 8
    - 2) 比較試験…………… 8
    - 3) 安全性試験…………… 8
    - 4) 患者・病態別試験…………… 8
  - (6) 治療的使用…………… 9
    - 1) 使用成績調査・特定使用成績調査 (特別調査)・製造販売後臨床試験 (市販後臨床試験)…………… 9
    - 2) 承認条件として実施予定の内容又は実施した試験の概要…………… 9

## VI. 薬効薬理に関する項目

1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群…………… 10
2. 薬理作用…………… 10
  - (1) 作用部位・作用機序…………… 10
  - (2) 薬効を裏付ける試験成績…………… 10
  - (3) 作用発現時間・持続時間…………… 10

## VII. 薬物動態に関する項目

1. 血中濃度の推移・測定法…………… 11
  - (1) 治療上有効な血中濃度…………… 11
  - (2) 最高血中濃度到達時間…………… 11
  - (3) 臨床試験で確認された血中濃度…………… 11
  - (4) 中毒域…………… 11
  - (5) 食事・併用薬の影響…………… 11
  - (6) 母集団 (ポピュレーション) 解析により判明した薬物体内動態変動要因…………… 11
2. 薬物速度論的パラメータ…………… 11

(1) 解析方法	11
(2) 吸収速度定数	11
(3) バイオアベイラビリティ	11
(4) 消失速度定数	12
(5) クリアランス	12
(6) 分布容積	12
(7) 血漿蛋白結合率	12
3. 吸収	12
4. 分布	12
(1) 血液-脳関門通過性	12
(2) 血液-胎盤関門通過性	12
(3) 乳汁への移行性	12
(4) 髄液への移行性	12
(5) その他の組織への移行性	12
5. 代謝	12
(1) 代謝部位及び代謝経路	12
(2) 代謝に関与する酵素 (CYP450 等) の分子種	12
(3) 初回通過効果の有無及びその割合	12
(4) 代謝物の活性の有無及び比率	13
(5) 活性代謝物の速度論的パラメータ	13
6. 排泄	13
(1) 排泄部位及び経路	13
(2) 排泄率	13
(3) 排泄速度	13
7. トランスポーターに関する情報	13
8. 透析等による除去率	13

## VIII. 安全性 (使用上の注意等) に関する項目

1. 警告内容とその理由	14
2. 禁忌内容とその理由 (原則禁忌を含む)	14
3. 効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由	14
4. 用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由	14
5. 慎重投与内容とその理由	14
6. 重要な基本的注意とその理由及び処置方法	15
7. 相互作用	15
(1) 併用禁忌とその理由	15
(2) 併用注意とその理由	15
8. 副作用	16
(1) 副作用の概要	16
(2) 重大な副作用と初期症状	16
(3) その他の副作用	16

(4) 項目別副作用発現頻度及び臨床検査値異常一覧	17
(5) 基礎疾患、合併症、重症度及び手術の有無等背景別の副作用発現頻度	18
(6) 薬物アレルギーに対する注意及び試験法	19
9. 高齢者への投与	19
10. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与	19
11. 小児等への投与	19
12. 臨床検査結果に及ぼす影響	19
13. 過量投与	19
14. 適用上の注意	20
15. その他の注意	20
16. その他	20

## IX. 非臨床試験に関する項目

1. 薬理試験	21
(1) 薬効薬理試験 (「VI. 薬効薬理に関する項目」参照)	21
(2) 副次的薬理試験	21
(3) 安全性薬理試験	21
(4) その他の薬理試験	21
2. 毒性試験	21
(1) 単回投与毒性試験	21
(2) 反復投与毒性試験	21
(3) 生殖発生毒性試験	21
(4) その他の特殊毒性	21

## X. 管理的事項に関する項目

1. 規制区分	22
2. 有効期間又は使用期限	22
3. 貯法・保存条件	22
4. 薬剤取扱い上の注意点	22
(1) 薬局での取扱い上の留意点について	22
(2) 薬剤交付時の取扱いについて (患者等に留意すべき必須事項等)	22
(3) 調剤時の留意点について	22
5. 承認条件等	22
6. 包装	22
7. 容器の材質	22
8. 同一成分・同効薬	23
9. 国際誕生年月日	23
10. 製造販売承認年月日及び承認番号	23
11. 薬価基準収載年月日	23
12. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等の年月日及びその内容	23

---

13. 再審査結果、再評価結果公表年月日 及びその内容	23
14. 再審査期間	23
15. 投薬期間制限医薬品に関する情報	23
16. 各種コード	24
17. 保険給付上の注意	24
<b>XI. 文献</b>	
1. 引用文献	25
2. その他の参考文献	25
<b>XII. 参考資料</b>	
1. 主な外国での発売状況	26
2. 海外における臨床支援情報	26
<b>XIII. 備考</b>	
その他の関連資料	27
〈別表〉	28

## I. 概要に関する項目

---

### 1. 開発の経緯

ブチロフェノン系化合物はJanssen研究所で合成されたものであるが、その出発点は合成麻薬性鎮痛剤のメペリジンとされている。

メペリジンからブチロフェノン系薬剤のプロトタイプといわれているハロペリドールがPaul A. J. Janssenにより合成されて以来、約 5000 の誘導体が作られ、その中の十数種の化合物につき臨床試験が行われた。プロピタンの有効成分であるピバンペロンは 6 番目に開発されたもので、外国では Dipiperon の名で商品化されている。

日本においては、プロピタン錠は 1965 年 3 月、プロピタン散は 1967 年 1 月に販売が開始された。その後医療事故防止対策のため、販売名が変更され、プロピタン散はプロピタン散 10% として 2001 年 7 月、プロピタン錠はプロピタン錠 50mg として 2007 年 8 月に製造販売承認され、現在に至っている。

### 2. 製品の治療学的・製剤学的特性

プロピタンの有効成分であるピバンペロンは、ブチロフェノン系薬剤で、急性・慢性統合失調症の幻覚・妄想など異常体験を早期に消退させ、不安、緊張、興奮などの症状にも抑制作用を示す。

## II. 名称に関する項目

---

### 1. 販売名

#### (1) 和名

プロピタン<sup>®</sup>錠 50mg

プロピタン<sup>®</sup>散 10%

#### (2) 洋名

Propitan<sup>®</sup> Tablets 50mg

Propitan<sup>®</sup> Powder 10%

#### (3) 名称の由来

精神症状の寛解という意味でpropitiate（やわらげる、なだめる）の「propi」に接尾語の「tan」をつけてPropitanとした。

### 2. 一般名

#### (1) 和名（命名法）

ピパンペロン塩酸塩（JAN）

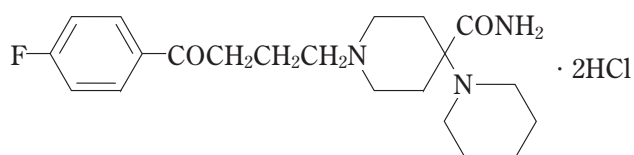
#### (2) 洋名（命名法）

Pipamperone Hydrochloride（JAN）

#### (3) ステム

トランキライザー、神経遮断薬、4'-フルオロ-4-ピペリジノブチロフェノン誘導体：-perone

### 3. 構造式又は示性式



### 4. 分子式及び分子量

分子式： $\text{C}_{21}\text{H}_{30}\text{FN}_3\text{O}_2 \cdot 2\text{HCl}$

分子量：448.40

### 5. 化学名（命名法）

1'-[3-(*p*-fluorobenzoyl)propyl]-[1,4'-bipiperidine]-4'-carboxamide dihydrochloride

(IUPAC命名法による)



## Ⅱ. 名称に関する項目

---

### 6. 慣用名、別名、略号、記号番号

別名：塩酸フロロピパミド

Floropipamide Hydrochloride

別名：塩酸ピパンペロン

Pipamperone Hydrochloride

Pipamperone (INN)

治験番号：E - 105

### 7. CAS登録番号

2448 - 68 - 2 (Pipamperone Hydrochloride)

1893 - 33 - 0 (Pipamperone)

### Ⅲ. 有効成分に関する項目

---

#### 1. 物理化学的性質

##### (1) 外観・性状

本品は白色～淡黄色の結晶又は結晶性の粉末で、においはなく、苦味及び酸味がある。

##### (2) 溶解性

本品は水又はギ酸に溶けやすく、メタノールにやや溶けにくく、エタノール(95)に溶けにくく、アセトン、酢酸エチル又は酢酸(100)に極めて溶けにくく、無水酢酸にはほとんど溶けない。

##### (3) 吸湿性

該当資料なし

##### (4) 融点(分解点)、沸点、凝固点

融点：約 255℃(分解)

##### (5) 酸塩基解離定数

該当資料なし

##### (6) 分配係数

該当資料なし

##### (7) その他の主な示性値

###### 1) 紫外可視吸収スペクトル

極大吸収波長：247～249nm(1 → 50,000)

###### 2) 水溶液のpH

約 3(1 → 20)

#### 2. 有効成分の各種条件下における安定性

本品は光により変色する。

#### 3. 有効成分の確認試験法

局外規ピバンペロン塩酸塩の確認試験法による。




#### 4. 有効成分の定量法

局外規ピバンペロン塩酸塩の定量法による。

## IV. 製剤に関する項目

### 1. 剤形

#### (1) 剤形の区別、外観及び性状

販売名	剤形 識別コード	外 形			性 状
		表	裏	側 面	
プロピタン錠 50mg	フィルム コート錠				黄 色
	€ 112	直径 (mm)・質量 (mg)・厚さ (mm) 8.2            230            4.1			
プロピタン散 10%	散 剤				白 色

#### (2) 製剤の物性

プロピタン錠 50mg

1. 硬度：68.6N 以上
2. 崩壊性

日局一般試験法 崩壊試験法 即放性製剤の項により試験を行うとき、これに適合する。

#### (3) 識別コード

プロピタン錠 50mg：€ 112

#### (4) pH、浸透圧比、粘度、比重、無菌の旨及び安定な pH 域等

該当資料なし

### 2. 製剤の組成

#### (1) 有効成分（活性成分）の含量

プロピタン錠 50mg：1 錠中にピパンペロン塩酸塩 50mg を含有する。

プロピタン散 10%：1g 中にピパンペロン塩酸塩 100mg を含有する。

#### (2) 添加物

プロピタン錠 50mg：添加物として黄色三二酸化鉄、酸化チタン、ステアリン酸カルシウム、タルク、トウモロコシデンプン、乳糖水和物、ヒプロメロース、ポビドン、マクロゴール 6000 を含有する。

プロピタン散 10%：添加物としてサッカリンナトリウム水和物、ステアリン酸、セラセフェート、ヒドロキシプロピルスターチ、メチルセルロースを含有する。

#### (3) その他

該当しない

### 3. 懸濁剤、乳剤の分散性に対する注意

該当しない

## IV. 製剤に関する項目

### 4. 製剤の各種条件下における安定性

プロピタン錠 50mg

試験方法	保存条件	包装形態	保存期間	試験項目	結果	
長期保存	25℃/60%RH	PTP + 紙箱	36 カ月	性状 溶出性 含量	いずれの試験項目においても変化なし。	
		ポリエチレン容器 + 紙箱			いずれの試験項目においても変化なし。	
無包装	温度	40℃	褐色ガラス瓶 (密栓)	3 カ月	性状 溶出性 硬度 含量	いずれの試験項目においても変化なし。
	湿度	25℃/75%RH	シャーレ (開放)	3 カ月		いずれの試験項目においても変化なし。
	光	2 万 lx	シャーレ (開放)	60 時間*		いずれの試験項目においても変化なし。

※：キセノンランプを 60 時間 (総照度 120 万 lx・hr、総近紫外照射エネルギー 200W・h/m<sup>2</sup>) 照射

プロピタン散 10%

試験方法	保存条件	包装形態	保存期間	試験項目	結果	
長期保存	25℃/60%RH	ポリエチレン容器 + 乾燥剤 + 紙箱	36 カ月	性状 溶出性 乾燥減量 含量	いずれの試験項目においても変化なし。	
無包装	温度	40℃	褐色ガラス瓶 (密栓)	3 カ月	性状 溶出性 乾燥減量 含量	いずれの試験項目においても変化なし。
	湿度	25℃/75%RH	シャーレ (開放)	3 カ月		乾燥減量増加 (1 カ月後規格値外)、その他の試験項目においては変化なし。
	光	2 万 lx	シャーレ (開放)	60 時間*		60 万 lx・hr (30 時間) で帯黄白となった。その他の試験項目においては変化なし。

※：キセノンランプを 60 時間 (総照度 120 万 lx・hr、総近紫外照射エネルギー 200W・h/m<sup>2</sup>) 照射

### 5. 調製法及び溶解後の安定性

該当しない

### 6. 他剤との配合変化 (物理化学的变化)

プロピタン錠 50mg：錠剤のため、配合変化試験を行っていない。

プロピタン散 10%：本剤は通常の状態では吸湿しないが高湿状態では吸湿傾向が認められるので、吸湿性の強い薬剤との配合には注意すること。

他剤との配合変化は巻末の別表「プロピタン散 10% 配合試験成績一覧」に示した。

## IV. 製剤に関する項目

---

### 7. 溶出性

プロピタン錠 50mg

方 法：日局一般試験法、溶出試験法（パドル法）

条 件：回転数 毎分 50 回転

試験液 水 900mL

測定法 液体クロマトグラフィー（波長：248nm）

規 格：本品の 30 分間の溶出率が 85% 以上のとき適合する。

プロピタン散 10%

方 法：日局一般試験法、溶出試験法（パドル法）

条 件：回転数 毎分 50 回転

試験液 水 900mL

測定法 液体クロマトグラフィー（波長：248nm）

規 格：本品の 15 分間の溶出率が 80% 以上のとき適合する。

### 8. 生物学的試験法

該当しない

### 9. 製剤中の有効成分の確認試験法

紫外可視吸光度測定法

### 10. 製剤中の有効成分の定量法

プロピタン錠 50mg

紫外可視吸光度測定法

プロピタン散 10%

液体クロマトグラフィー

### 11. 力価

該当しない

### 12. 混入する可能性のある夾雑物

該当資料なし

### 13. 注意が必要な容器・外観が特殊な容器に関する情報

該当資料なし

### 14. その他

該当しない

## V. 治療に関する項目

### 1. 効能又は効果

統合失調症

### 2. 用法及び用量

通常、成人にはピパンペロン塩酸塩として、最初1～2週間は1日50～150mg、以後漸増し、1日150～600mgを3回にわけて経口投与する。

なお、年齢、症状により適宜増減する。

<参考：製剤換算表>

販売名	成人1日量（通常）	
	最初1～2週間	最初1～2週間以後
プロピタン錠50mg	1～3錠	3～12錠
プロピタン散10%	0.5～1.5g	1.5～6g

### 3. 臨床成績

#### (1) 臨床データパッケージ

#### (2) 臨床効果

二重盲検試験及び一般臨床試験において、統合失調症に対する本剤の有用性が認められている。(①)

#### (3) 臨床薬理試験

該当資料なし

#### (4) 探索的試験

該当資料なし

#### (5) 検証的試験

##### 1) 無作為化並行用量反応試験

該当資料なし

##### 2) 比較試験

ピパンペロン塩酸塩について、急性期統合失調症38例、慢性期統合失調症46例、非定型統合失調症5例、アルコール精神病3例の計86例（本剤投与群：59例、プラセボ群：27例）を対象に、プラセボを対照とした二重盲検法による試験を行った。本剤は100mgより投与を開始して漸増し、随伴症状が強度に出現すると漸減する方法を取り、約6カ月間臨床観察を行った。精神症状に対する有効率はプラセボ20.6%、ピパンペロン塩酸塩57.2%であり、ピパンペロン塩酸塩投与群が明らかに症状改善率が高かった。ピパンペロン塩酸塩は精神症状のうち、幻覚、妄想、作為体験や異常行動に効果的で、とくに他のブチロフェノン系薬剤に比べ、抗幻覚・抗妄想作用が著しかった。(①)

##### 3) 安全性試験

該当資料なし

##### 4) 患者・病態別試験

該当資料なし

## V. 治療に関する項目

---

### (6) 治療的使用

- 1) 使用成績調査・特定使用成績調査（特別調査）・製造販売後臨床試験（市販後臨床試験）  
該当資料なし
  
- 2) 承認条件として実施予定の内容又は実施した試験の概要  
該当しない

## VI. 薬効薬理に関する項目

---

### 1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群

ハロペリドール、スピペロン、クロルプロマジン

### 2. 薬理作用

#### (1) 作用部位・作用機序

本薬の作用機序は、黒質－線状体路をはじめとするドパミン作動性中枢神経におけるドパミン受容体遮断作用である。

#### (2) 薬効を裏付ける試験成績

##### 1. クロルプロマジンタイプの作用

本薬は、ラットによる実験で抗ノルアドレナリン作用、条件回避反応抑制作用、カタレプシー惹起作用、眼瞼下垂作用、抗アポモルフィン作用、抗トリプタミン作用、抗アンフェタミン作用等の傾向からクロルプロマジンタイプの作用を有する薬剤に分類される。 (2)

##### 2. 抗アンフェタミン作用、抗トリプタミン作用

本薬は、ラットによる実験で抗アンフェタミン作用がクロルプロマジンよりも5倍強力である。また、抗トリプタミン作用が相対的に強いことなどから抗精神病薬としての治療効果が期待できる。 (2)

#### (3) 作用発現時間・持続時間

該当資料なし



## Ⅶ. 薬物動態に関する項目

### 1. 血中濃度の推移・測定法

#### (1) 治療上有効な血中濃度

該当資料なし

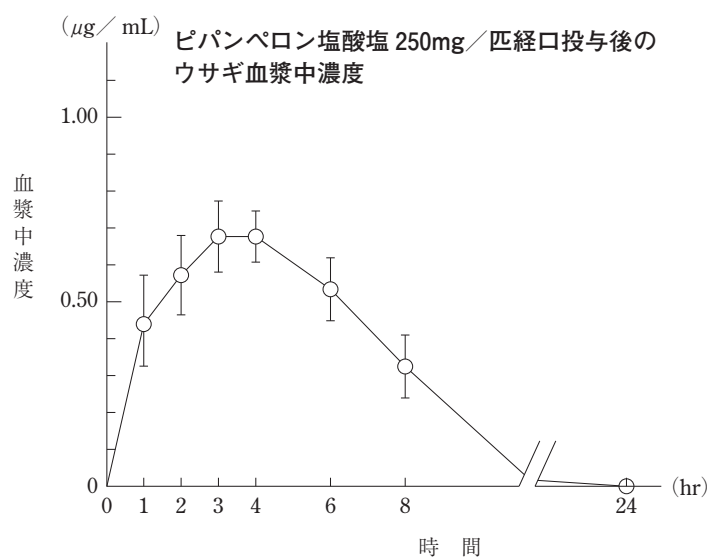
#### (2) 最高血中濃度到達時間

該当資料なし

#### (3) 臨床試験で確認された血中濃度

〈参考〉

ウサギに本薬 250mg/匹を単回経口投与した場合に、投与 3~4 時間後に最高血漿中濃度 ( $0.67\mu\text{g}/\text{mL}$ ) に達し、以後比較的速やかに減少した。



#### (4) 中毒域

該当資料なし

#### (5) 食事・併用薬の影響

該当資料なし

#### (6) 母集団 (ポピュレーション) 解析により判明した薬物体内動態変動要因

該当資料なし

### 2. 薬物速度論的パラメータ

#### (1) 解析方法

該当資料なし

#### (2) 吸収速度定数

該当資料なし

#### (3) バイオアベイラビリティ

該当資料なし

## VII. 薬物動態に関する項目

---

(4) 消失速度定数

該当資料なし

(5) クリアランス

該当資料なし

(6) 分布容積

該当資料なし

(7) 血漿蛋白結合率

該当資料なし

### 3. 吸収

該当資料なし

### 4. 分布

(1) 血液－脳関門通過性

〈参考〉

通過する。ラット経口投与で1時間後に最大に達する。

(2) 血液－胎盤関門通過性

該当資料なし

(3) 乳汁への移行性

該当資料なし

(4) 髄液への移行性

該当資料なし

(5) その他の組織への移行性

該当資料なし

### 5. 代謝

(1) 代謝部位及び代謝経路

主代謝物

親化合物（ピバンペロン）の脱アミド体

(2) 代謝に関与する酵素（CYP450等）の分子種

該当資料なし

(3) 初回通過効果の有無及びその割合

該当資料なし

## VII. 薬物動態に関する項目

---

### (4) 代謝物の活性の有無及び比率

該当資料なし

### (5) 活性代謝物の速度論的パラメータ

該当資料なし

## 6. 排泄

### (1) 排泄部位及び経路

〈参考〉

(ラット 40mg/kg 経口投与)

尿中排泄 49%

糞中排泄 44%

投与 24 時間以内に約 90%が排泄された。

尿中排泄は投与後 2~4 時間に最も多く認められた。

### (2) 排泄率

該当資料なし

### (3) 排泄速度

該当資料なし

## 7. トランスポーターに関する情報

該当資料なし

## 8. 透析等による除去率

該当資料なし

## Ⅷ. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

---

### 1. 警告内容とその理由

該当しない

### 2. 禁忌内容とその理由（原則禁忌を含む）

(1) 昏睡状態の患者又はバルビツール酸誘導体等の中枢神経抑制剤の強い影響下にある患者

（解説）

中枢神経抑制作用を増強させるおそれがある。

(2) 重症の心不全患者

（解説）

症状を悪化させるおそれがある。

(3) パーキンソン病のある患者

（解説）

錐体外路症状があらわれやすい。

(4) 本剤の成分又はブチロフェノン系化合物に対し過敏症の既往歴のある患者

(5) アドレナリンを投与中の患者（アドレナリンをアナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く）

（解説）

「Ⅷ.-7. 相互作用」の項参照

### 3. 効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由

該当しない

### 4. 用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由

該当しない

### 5. 慎重投与内容とその理由

(1) 肝障害のある患者

（解説）

症状を悪化させるおそれがある。

(2) 心・血管疾患、低血圧又はそれらの疑いのある患者

（解説）

一過性の血圧降下があらわれることがある。

(3) てんかん等の痙攣性疾患又はこれらの既往歴のある患者

（解説）

痙攣閾値を低下させることがある。

(4) 高齢者

（解説）

「Ⅷ.-9. 高齢者への投与」の項参照

## VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

(5) 小児

（解説）

「VIII.-11. 小児等への投与」の項参照

(6) 薬物過敏症の既往歴のある患者

### 6. 重要な基本的注意とその理由及び処置方法

- (1) 眠気、注意力・集中力・反射運動能力等の低下が起こることがあるので、本剤投与中の患者には自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させないように注意すること。
- (2) 本剤は制吐作用を有するため、他の薬剤に基づく中毒、腸閉塞、脳腫瘍等による嘔吐症状を不顕性化することがあるので注意すること。
- (3) 抗精神病薬において、肺塞栓症、静脈血栓症等の血栓塞栓症が報告されているので、不動状態、長期臥床、肥満、脱水状態等の危険因子を有する患者に投与する場合には注意すること。

### 7. 相互作用

#### (1) 併用禁忌とその理由

併用禁忌（併用しないこと）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
アドレナリン （アナフィラキシーの救急治療に使用する場合を除く） （ボスミン）	アドレナリンの作用を逆転させ、重篤な血圧降下を起こすことがある。	アドレナリンはアドレナリン作動性 $\alpha$ 、 $\beta$ -受容体の刺激剤であり、本剤の $\alpha$ -受容体遮断作用により、 $\beta$ -受容体刺激作用が優位となり、血圧降下作用が増強される。

#### (2) 併用注意とその理由

併用注意（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
中枢神経抑制剤 バルビツール酸誘導体等	中枢神経抑制作用が増強することがあるので、減量するなど注意すること。	本剤およびこれらの薬剤の中枢神経抑制作用による。
アルコール	飲酒により相互に作用を増強することがあるので、用量を調節するなど注意すること。	アルコールは中枢神経抑制作用を有する。
リチウム	心電図変化、重症の錐体外路症状、持続性のジスキネジア、突発性の悪性症候群（Syndrome malin）、非可逆性の脳障害を起こすおそれがあるので、観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。	機序は不明であるが、併用による抗ドパミン作用の増強等が考えられている。
抗ドパミン作用を有する薬剤 ベンザミド系薬剤 メトクロプラミド スルピリド チアプリド等 ドンペリドン等	内分泌機能異常、錐体外路症状が発現することがある。	併用により抗ドパミン作用が強くなる。

## VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
タンドスピロンクエン酸塩	錐体外路症状を増強するおそれがある。	タンドスピロンクエン酸塩は弱い抗ドパミン作用を有する。
ドパミン作動薬 レボドパ製剤 プロモクリプチン等	これらの薬剤のドパミン作動薬としての作用が減弱することがある。	ドパミン作動性神経において、作用が拮抗することによる。

### 8. 副作用

#### (1) 副作用の概要

総症例 2,157 例について副作用を検討した。（再評価結果時）

#### (2) 重大な副作用と初期症状

- 1) 悪性症候群 (Syndrome malin)** 無動緘黙、強度の筋強剛、嚥下困難、頻脈、血圧の変動、発汗等が発現し、それに引き続き発熱がみられる場合は、投与を中止し、体冷却、水分補給等の全身管理とともに適切な処置を行うこと。本症発症時には、白血球の増加や血清CK（CPK）の上昇がみられることが多く、また、ミオグロビン尿を伴う腎機能の低下がみられることがある。なお、他のブチロフェノン系化合物の投与中、高熱が持続し、意識障害、呼吸困難、循環虚脱、脱水症状、急性腎障害へと移行し、死亡した例が報告されている。
- 2) 腸管麻痺** 腸管麻痺（食欲不振、悪心・嘔吐、著しい便秘、腹部の膨満あるいは弛緩及び腸内容物のうっ滞等の症状）を来し、麻痺性イレウスに移行することがあるので、腸管麻痺があらわれた場合には投与を中止すること。  
なお、この悪心・嘔吐は、本剤の制吐作用により不顕性化することもあるので注意すること。
- 3) 突然死** 他のブチロフェノン系化合物による治療中、原因不明の突然死が起きたとの報告がある。
- 4) 抗利尿ホルモン不適合分泌症候群 (SIADH)** 類似化合物（ハロペリドール等）で、低ナトリウム血症、低浸透圧血症、尿中ナトリウム排泄量の増加、高張尿、痙攣、意識障害等を伴う抗利尿ホルモン不適合分泌症候群（SIADH）があらわれることが報告されている。
- 5) 無顆粒球症、白血球減少** 無顆粒球症、白血球減少があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 6) 肺塞栓症、深部静脈血栓症** 抗精神病薬において、肺塞栓症、静脈血栓症等の血栓塞栓症が報告されているので、観察を十分に行い、息切れ、胸痛、四肢の疼痛、浮腫等が認められた場合には、投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

#### (3) その他の副作用

	5%以上	0.1～5%未満	0.1%未満	頻度不明
循環器 <sup>注1)</sup>	血圧降下	頻脈		心電図変化（QT間隔の延長、T波の変化等）
肝臓 <sup>注2)</sup>		肝障害		
錐体外路症状	パーキンソン症候群（手指振戦、筋強剛、流涎等）	アカシジア（静坐不能）、ジスキネジア（痙攣性斜頸、顔面及び頸部の攣縮、後弓反張、眼球回転発作等）		長期投与による口周部等の不随意運動 <sup>注3)</sup>
眼		眼の調節障害		長期又は大量投与による角膜・水晶体の混濁、角膜等の色素沈着
皮膚 <sup>注4)</sup>			光線過敏症	

## VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

	5%以上	0.1～5%未満	0.1%未満	頻度不明
過敏症 <sup>注4)</sup>		発疹		痒疹
消化器		悪心・嘔吐、食欲不振、便秘、腹痛		
内分泌		体重増加		月経異常、乳汁分泌、高プロラクチン血症、女性型乳房
精神神経系		焦躁感、不眠、眠気、眩暈、頭痛・頭重		興奮
その他	倦怠感	口渇、鼻閉		

注1) 観察を十分に行い、異常が認められた場合には減量又は投与を中止すること。

注2) 観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止すること。

注3) 投与中止後も持続することがある。

注4) このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。

### (4) 項目別副作用発現頻度及び臨床検査値異常一覧

[副作用及び臨床検査値の変動]

総症例 2,157 例について副作用を検討した。主な副作用としては、パーキンソン症候群 247 件 (11.45%)、血圧低下・起立性低血圧 198 件 (9.18%)、倦怠感 136 件 (6.31%)、振戦 104 件 (4.82%)、焦躁・不安 103 件 (4.78%)、アカシジア 83 件 (3.85%)、不眠 67 件 (3.11%)、筋強剛 58 件 (2.69%)、口渇 50 件 (2.32%)、眠気 43 件 (1.99%)、眩暈 41 件 (1.90%)、心悸亢進 38 件 (1.76%)、悪心・嘔吐 36 件 (1.67%)、流涎 32 件 (1.48%)、発疹 24 件 (1.11%)、頻脈 22 件 (1.02%)、便秘 20 件 (0.93%)、食欲不振 20 件 (0.93%)、鼻閉 20 件 (0.93%)、ジスキネジア 17 件 (0.79%)、頭痛・頭重 12 件 (0.56%)、体重増加 12 件 (0.56%)、眼球転位 11 件 (0.51%)、視力調節障害 4 件 (0.19%) であった。

臨床検査値の変動としては、肝機能障害 28 件 (1.30%) がみられた。

#### 副作用発現状況

分類名	副作用症状名	副作用発現件数	副作用発現率 (%)
皮膚・皮膚付属器障害	発疹	24	1.11
	皮膚色素増加	2	0.09
	感光性	1	0.05
筋・骨格系障害	関節痛	1	0.05
中枢・末梢神経系障害	パーキンソン症候群	247	11.45
	振戦 (手指振戦)	104	4.82
	アカシジア	83	3.85
	筋強剛	58	2.69
	眩暈	41	1.90
	その他の錐体外路症状	21	0.97
	ジスキネジア (筋緊張異常及び異常行動)	17	0.79
	急性発作症状	12	0.56
	頭痛・頭重	12	0.56
	眼球転位	11	0.51
	仮面様顔貌	10	0.46
	舌のもつれ	7	0.32
	失禁	5	0.23
	昏迷	3	0.14
	活動性亢進	2	0.09
	緊張低下	2	0.09
	後弓反張	2	0.09
	異常脳波の増悪	1	0.05
	肩こり・のぼせ	1	0.05
	口唇のこわばり	1	0.05

## VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

分類名	副作用症状名	副作用発現件数	副作用発現率(%)
自律神経系障害	口渇	50	2.32
	流涎	32	1.48
	多汗	6	0.28
	顔面蒼白	3	0.14
視覚障害	視力調整障害	4	0.19
	羞明	3	0.14
精神障害	焦躁・不安	103	4.78
	不眠	67	3.11
	眠気	43	1.99
	徘徊	4	0.19
	拒薬	1	0.05
	多幸感	1	0.05
	独語	1	0.05
	破衣	1	0.05
消化管障害	悪心・嘔吐	36	1.67
	便秘	20	0.93
	食欲不振	20	0.93
	胃腸障害	12	0.56
	嚥下困難	3	0.14
	腹痛	3	0.14
肝臓・胆管系障害	肝機能障害	28	1.30
	黄疸	1	0.05
心・血管障害（一般）	血圧低下・起立性低血圧	198	9.18
	心臓血管への影響	23	1.07
心拍数・心リズム障害	心悸亢進	38	1.76
	頻脈	22	1.02
	徐脈	1	0.05
	不整脈	1	0.05
呼吸器系障害	鼻閉	20	0.93
	鼻出血	2	0.09
	呼吸困難	1	0.05
赤血球障害	貧血	6	0.28
白血球・網内系障害	白血球減少	1	0.05
泌尿器系障害	排尿異常（多尿・頻尿・排尿困難）	30	1.39
一般的全身障害	倦怠感（脱力感・疲労）	136	6.31
	浮腫	18	0.83
	体重増加	12	0.56
	紅潮	4	0.19
	熱感	3	0.14
	発熱	1	0.05
	身体異和感	1	0.05

(1973年1月集計)

- (5) 基礎疾患、合併症、重症度及び手術の有無等背景別の副作用発現頻度  
該当資料なし



## VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

### (6) 薬物アレルギーに対する注意及び試験法

【禁忌】（次の患者には投与しないこと）

本剤の成分又はブチロフェノン系化合物に対し過敏症の既往歴のある患者

慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）

薬物過敏症の既往歴のある患者

その他の副作用

過敏症<sup>注</sup>：発疹（0.1～5%未満）、瘙痒（頻度不明）

注）このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。

### 9. 高齢者への投与

高齢者では、錐体外路症状が起りやすいので、少量から投与を開始するなど慎重に投与すること。

### 10. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与

妊婦、妊娠している可能性のある婦人又は授乳婦には投与しないことが望ましい。

（解説）

他のブチロフェノン系化合物による動物実験で胎児吸収、流産等の胎児毒性が報告されている。

妊娠後期に抗精神病薬が投与されている場合、新生児に哺乳障害、傾眠、呼吸障害、振戦、筋緊張低下、易刺激性等の離脱症状や錐体外路症状があらわれたとの報告がある。

また、他のブチロフェノン系化合物による動物実験で乳汁中への移行が報告されている。

### 11. 小児等への投与

小児に対する安全性は確立していない。

### 12. 臨床検査結果に及ぼす影響

該当しない

### 13. 過量投与

(1) 症状

主な症状は、重症の錐体外路症状、低血圧、過度の鎮静である。また、まれに QT 延長、心室性不整脈（Torsades de pointes を含む）、心停止があらわれることがある。

(2) 処置

一般的な薬物除去法（胃洗浄、活性炭投与等）を行う。特異的な解毒剤はない。QT 延長のリスクがあるため心電図異常に注意すること。気道確保（必要であれば人工呼吸）等の維持療法や対症療法を行う。低血圧や循環虚脱があらわれた場合には、輸液、血漿製剤、アルブミン製剤、ドパミン、ドブタミン等の昇圧剤（アドレナリンは禁忌）の投与により処置を行う。また、重症の錐体外路症状に対して、抗コリン作用のある抗パーキンソン剤を投与する。

## Ⅷ. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

---

### 14. 適用上の注意

薬剤交付時（錠）

PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。（PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜に刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することが報告されている）

### 15. その他の注意

外国で実施された認知症に関連した精神病症状（承認外効能・効果）を有する高齢患者を対象とした17の臨床試験において、非定型抗精神病薬投与群はプラセボ投与群と比較して死亡率が1.6～1.7倍高かったとの報告がある。また、外国での疫学調査において、定型抗精神病薬も非定型抗精神病薬と同様に死亡率の上昇に関与するとの報告がある。

### 16. その他

該当しない

## Ⅷ. 非臨床試験に関する項目

### 1. 薬理試験

(1) 薬効薬理試験（「Ⅵ. 薬効薬理に関する項目」参照）

(2) 副次的薬理試験

該当資料なし

(3) 安全性薬理試験

該当資料なし

(4) その他の薬理試験

該当資料なし

### 2. 毒性試験

(1) 単回投与毒性試験

マウス、ラットに対する単回投与毒性試験は以下のとおりである。

LD<sub>50</sub> (mg/kg)

動物種 投与経路	マウス		ラット	
	雄	雌	雄	雌
経口	1,120	870	910	1,000~1,250

(2) 反復投与毒性試験

1) 亜急性毒性

本薬 12.5、50、100mg/kg/日を飼料に混合して 15 週間 Wistar 系雄ラットに経口投与した。その結果、体重及び臓器重量に異常はみられず、病理組織学的検索においても特記すべき異常は認められなかった。

2) 慢性毒性

該当資料なし

(3) 生殖発生毒性試験

ICR-JCL系妊娠マウスに本薬を 25、50、75mg/kg/日、Wistar系妊娠ラットに 25、75mg/kg/日、妊娠ウサギには 10、40mg/kg/日をそれぞれ器官形成期に経口投与した。その結果、催奇形性はみられず、新生児の発育にも何ら影響は認められなかった。

(4) その他の特殊毒性

該当資料なし

## X. 管理的事項に関する項目

---

### 1. 規制区分

製 剤：プロピタン錠 50mg・散 10% 処方箋医薬品（注意－医師等の処方箋により使用すること）  
有効成分：ピパンペロン塩酸塩 該当しない

### 2. 有効期間又は使用期限

使用期限：3年

### 3. 貯法・保存条件

室温保存

散剤は開栓後湿気を避けて保存すること（湿気により着色することがある）。

### 4. 薬剤取扱い上の注意点

#### (1) 薬局での取扱い上の留意点について

該当しない

#### (2) 薬剤交付時の取扱いについて（患者等に留意すべき必須事項等）

「Ⅷ.-14. 適用上の注意」の項参照

くすりのしおり：有り

#### (3) 調剤時の留意点について

該当しない

### 5. 承認条件等

該当しない

### 6. 包装

プロピタン錠 50mg……100錠(PTP)・500錠(バラ)・1,000錠(PTP)

プロピタン散 10% ……500g

### 7. 容器の材質

#### (1) プロピタン錠 50mg

PTP包装品

PTP：ポリプロピレン、アルミニウム

バラ包装品

容器：ポリエチレン

キャップ：ポリエチレン

#### (2) プロピタン散 10%

容器：ポリエチレン

キャップ（乾燥剤容器付き）：ポリエチレン

## X. 管理的事項に関する項目

### 8. 同一成分・同効薬

同一成分薬：なし

同 効 薬：

一 般 名	商 品 名	会 社 名
スピペロン	スピロピタン	サンノーバーエーザイ
ハロペリドール	セレネース	大日本住友
プロペリシアジン	ニューレプチル	高田製薬
レボメプロマジンマレイン酸塩	レボトミン	田辺三菱=吉富薬品 等

### 9. 国際誕生年月日

該当資料なし

### 10. 製造販売承認年月日及び承認番号

製造販売承認年月日：プロピタン錠 50mg：2007年8月31日

(旧販売名：プロピタン錠 承認年月日：1966年6月21日)

プロピタン散 10%：2001年7月17日

(旧販売名：プロピタン散 (10倍散) 承認年月日：1965年9月22日)

承 認 番 号：プロピタン錠 50mg：21900AMX01229000

プロピタン散 10%：21300AMZ00535000

### 11. 薬価基準収載年月日

プロピタン錠 50mg：2007年12月21日

(旧販売名：プロピタン錠 薬価基準収載年月日：1967年10月1日)

プロピタン散 10%：2001年9月7日

(旧販売名：プロピタン散 (10倍散) 薬価基準収載年月日：1967年7月1日)

### 12. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等の年月日及びその内容

用法及び用量の一部変更承認：2017年9月27日

### 13. 再審査結果、再評価結果公表年月日及びその内容

再評価結果公表年月日：1977年7月6日

再 評 価 結 果：効能・効果、用法・用量に変更なし

### 14. 再審査期間

該当しない

### 15. 投薬期間制限医薬品に関する情報

本剤は、投薬（あるいは投与）期間に関する制限は定められていない。

## X. 管理的事項に関する項目

---

### 16. 各種コード

包装	HOT(13桁)番号	厚生労働省 薬価基準収載 医薬品コード	レセプト電算コード
<b>プロピタン錠 50mg</b>			
PTP 100T	1013566 01 0203	1179 006F 1031	620006113
PTP 1000T	1013566 01 0204		
バラ 500T	1013566 01 0102		
<b>プロピタン散 10%</b>			
500g	1013559 01 0102	1179 006B 1030	610454077

### 17. 保険給付上の注意

該当しない

## XI. 文献

---

### 1. 引用文献

- |  |                | 文献請求番号  |
|--|----------------|---------|
| ① 長野俊光ら：精神医学,  | 9, 525 (1967)  | PP-0001 |
| ② Janssen, P.A.J. et al. : <i>Arzneim. Forsch.</i> , | 15, 104 (1965) | PP-0007 |

### 2. その他の参考文献

該当資料なし

## XII. 参考資料

---

### 1. 主な外国での発売状況

ピパンペロン塩酸塩は、Dipiperonの販売名でフランス等で販売されている。(2017年9月現在)

### 2. 海外における臨床支援情報

該当資料なし



### XIII. 備考

---

#### その他の関連資料

該当資料なし

### XIII. 備考

#### 〈別表〉

#### プロピタン散 10%

##### 1. 分包時の変化所見

保存条件	量(g)	分包材質	変化所見
室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	グラシン紙	外観変化なし 7日後微吸湿
1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	グラシン紙	微褐色

##### 2. 配合変化試験成績一覧

配合量欄に記載の量（配合薬／プロピタン散 10%）を配合後、グラシン紙で分包し、各保存条件にて外観を観察した。

配合薬	保存条件	配合量(g)	変化所見
112：セパゾン散 1% (㊟クロキサゾラム) 白色の微細な粒を含む粉末 第一三共	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	外観変化なし
112：セルシン散 1% (ジアゼパム) 白色の細粒を含む粉末 武田テバ薬品 = 武田薬品工業	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	外観変化なし
112：㊟クロルジアゼポキシド散 バランス散 10% (クロルジアゼポキシド) 帯黄白色の散剤 丸石製薬	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	40万lx・hrで微赤黄色 60万lx・hrで赤黄色
112：ベンザリン細粒 1% (ニトラゼパム) 白色の細粒 塩野義製薬 = 共和薬品工業	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	外観変化なし
112：ユーロジン散 1% (エスタゾラム) 白色の細粒状の粉末 武田テバ薬品 = 武田薬品工業	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	外観変化なし
112：レキソタン細粒 1% (㊟プロマゼパム) 白色の細粒 中外製薬 = エーザイ	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	20万lx・hrで淡褐色 40万lx・hrで褐色 60万lx・hrで赤褐色

### XIII. 備考

配合薬	保存条件	配合量(g)	変化所見
116：アーテン散1% (㊦トリヘキシフェニジル塩酸塩)  白色の細粒状の粉末  ファイザー	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	外観変化なし
117：オーラップ細粒1% (㊦ピモジド)  白色の細粒  アステラス製薬	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	外観変化なし
117：クロフェクトン顆粒10% (㊦クロカプラミン塩酸塩水和物)  白色の顆粒  田辺三菱製薬	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	20万lx・hrで黄褐色 40万lx・hrで褐色
117：㊦ハロペリドール細粒 セレネース細粒1% (ハロペリドール)  白色の細粒  大日本住友製薬	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	外観変化なし
117：レボトミン散10% (㊦レボメプロマジンマレイン酸塩)  白色の散剤  田辺三菱製薬	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	外観変化なし
441：ピレチア細粒10% (プロメタジンメチレンジサリチル酸塩)  白色の細粒  高田製薬	室温 (19±2℃) /75%RH 28日間	1.0	外観変化なし
	1,000 lx 25日間 (60万lx・hr)	1.0	40万lx・hrで微褐色 60万lx・hrで褐色

2017年6月作成



**サンノーバ株式会社**

群馬県太田市世良田町3038-2



**エーザイ株式会社**

東京都文京区小石川4-6-10